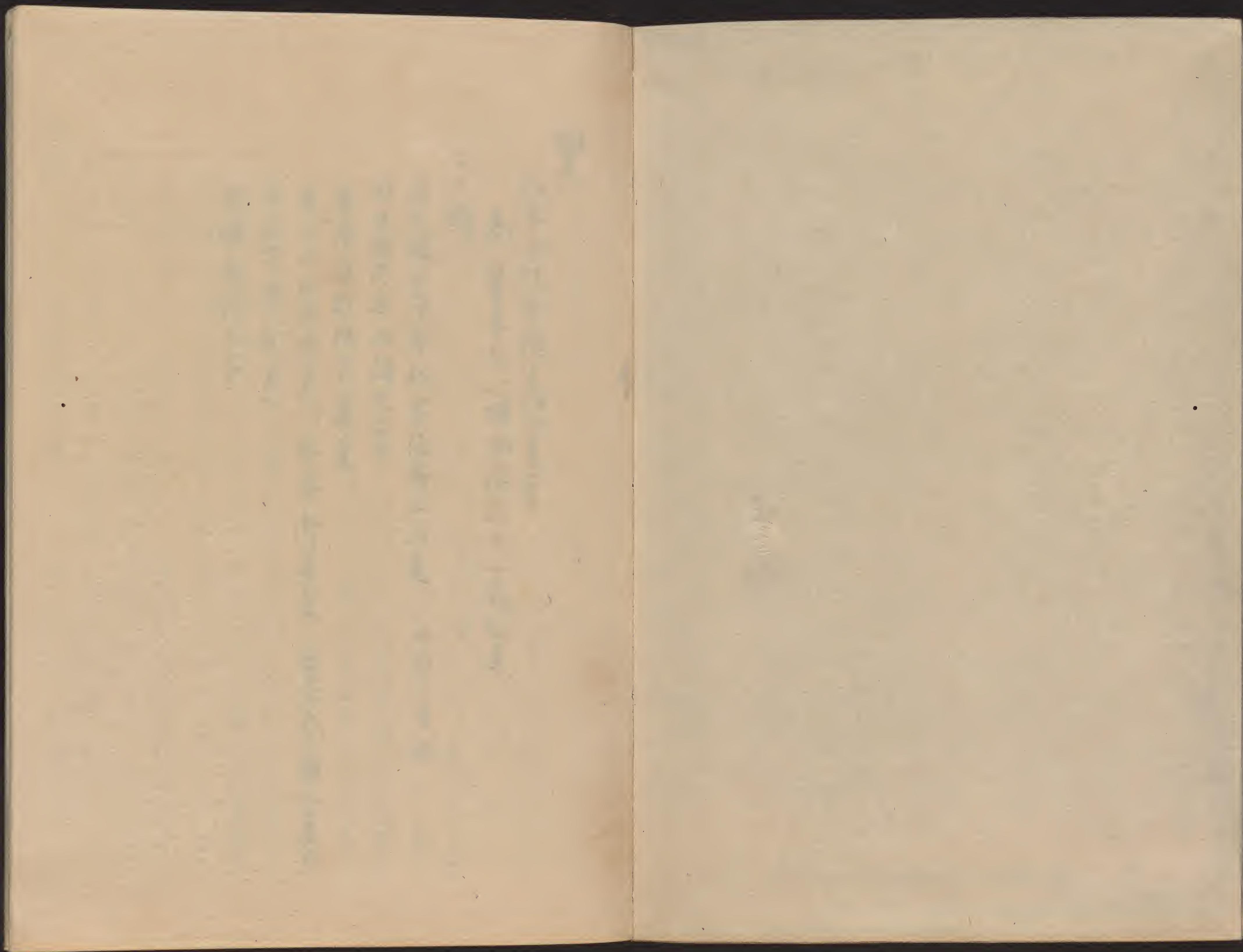


823  
M2 K2

此  
人  
甚

冥

16



閑屋

伊与守任常陸下向以来夏

是八賢木卷之時分源氏九二歲之夏  
廿八歲

源氏歸京次年秋常陸守上洛夏 九月十六日也

同日源氏石山詣之夏

常陸守於路奉逢夏

自石山於後时右朱門紙參拂述夏

右惠休小君之小君也

左陸守平去半

空端表為尼事

行せまくやうり里も生れぬる旅をぬれとて幻の仍早之  
美でまやいむれ冥屋れはとせよといふて小と  
ものや文事に用てうねりは天模乃並く花鳥の交遊事  
日此卷模乃並く源氏大八宗れ九月迄之とつれ未だ大八宗  
十月もくらまてれすを蓋せハ卯月のす迄之と仍は天模れ  
天模乃並く源氏大八代事かくもとゆうて走る八月の大半  
を角りはせりハ九月石山福乃事とぞうむ堅乃無くはき  
私事事得まうは天模乃走れ未だ源大八代十月までなる  
以事とりやまうとぞうとほくれを乃始し近ち  
此走ハ源大八宗れ九月までなれとそ様のよもしく娘の  
夫とさう蓋を失へ未に東移れ事とぞうを教へ乞  
皆一人とのお仕ひなるがこそは冥屋れ別はとぞう  
さやくにらぬまく模れなしの是れをひれゆけはとぞう  
人の風とひこ

伊与々元極君乃丈  
行次・伊与々  
花柳寺より相應済門のれをすよもゆうとく一玄摩子不勝く  
下向きひり

美源氏源廣へ却りしそれひ前ノトキニ玄摩子あて下りし

## 紀伊守

冥屋冥屋乃まよ之原氏四方達乃中川乃家所

伊与々行次・伊与々  
冥屋冥屋乃まよ之原氏四方達乃中川乃家所

伊与々行次・伊与々  
冥屋冥屋乃まよ之原氏四方達乃中川乃家所

翁人狀將妻元極君代主給く源氏東金一ト給  
利多の其秋とじとくハトムク  
翁人狀將妻元極君代主給く源氏東金一ト給  
利多の其秋とじとくハトムク

帝在位久也。其子之生，則有不肖者矣。故曰：「人主之子，必有過。」

人知其之多也。故有之。

文獻卷之二

急之既久而得之固之久矣此公之小之也

卷之九

此奇乃四友小名也。山野之士，非其好者，不以示人。

人少之者也。而人之多之者，則其後必有不善者矣。故曰：「小善可為，大惡不可為。」

花源氏サ八家ノ帰京代向く事ニハ多キ  
妻一任ロケ年はくス年タリテ原氏を治ムトシテ御金  
三手ノテトクミテモ前モナリテハ今モ又年少シテ七  
セイヘンノ日一と  
おほれ室ナム

石川は御身を人へ

石山寺

聖武天皇御

宇金就舊仙人建立  
記云聖武天皇僧正朗弁者先生震  
且修行者也爲來法向舍衛國欲渡流沙无功錢數月逗留  
天皇者先生沙船師也不願功錢湏渡修行僧既畢余時併修  
行僧爲酬之恩可生將來國王之由致誠精祈折言以冀念力生  
日本國王也然今生樂尼後生可受苦因也朗弁奏云建立矣  
伽藍可爲後世之貲糧天皇依教喻余建立東大寺奉鑄大仏  
依光汎沙金畫夜大息之間晏中有人奏曰水邊建立伽藍祈請  
砂金出來乞夢驚令求勝地建立觀音像不經半月野國初

貞砂金今之石山寺是也  
安  
生式郊々の山名也此變化有<sup>アリ</sup>又石山乃觀音寺也  
トチルカトシニカヘリトリモトハシテハシテ

は度々まくまくするや

仲よみとひ岩原氏の筆人

なれど下車を右之傍で停すと若ちいはるや

ゆきの小

車をまのめり

うちくは済むや

今れなはとてゆり

きほよりけり人まかがの風うけにほを乗用のこ

けよとて前後見るやもとへる

度きりの山

あらやとあくやとあく

てうともまうき

寒ふよされかくわく

寒風のりのりとゆ

寒ふとて寒ふとくわく

寒ふとてのねじとくわく

車としのれかく

けけりとれ

うぬなくかくとくわく

にゆくにゆく

車としのれかく

けけりとれ

（五）又（レ）襖、待襖也  
縫物（スイモト）  
捨除（スリヤシ）  
待襖、縫物等、捨除等也

縫物  
縫物

待與人連物矣。故降之也。

まくとて藏むとて居る所

一本心よりの心事深乃く角立つて 美因

或御祝。襖の裏に之を表す布を之れをとらしむ。

素視の

乃小馬早生の依左多  
氏人也之傳

多分御實むこと  
深きやゑよれき幻く  
行密とぞ近小里方の事と  
限らず其の例へ

字  
勸寫文至一盃酒。西方玄陽用無故人。三首詩也。

是日行之未竟者一也。其後又與某人同游於此，見其處有  
一石室，其形如龕，其高丈餘，其廣亦丈餘，其深亦丈餘。  
其門則在石室之外，其門之左右各有一石柱，其柱之  
上各有一石額，其額之左刻有“龍虎山”三字，其額之右  
刻有“龍虎洞”三字。其門之左右各有一石碑，其碑之  
上各刻有“龍虎山”三字。其門之左右各有一石碑，其碑之  
上各刻有“龍虎洞”三字。其門之左右各有一石碑，其碑之  
上各刻有“龍虎山”三字。其門之左右各有一石碑，其碑之  
上各刻有“龍虎洞”三字。

大にあつた事はうそをす  
かやねのうれ

又古  
冥山にて、むろの風氣のあつた、とては、わざと新をもつて、  
わざとて、むろの風氣のあつた、ふるい、

やまは二首ともとく

私乞入に至る事有り候事人を又(年)久  
く不絶有り候也 素宣様乃が中止多々有  
り

右山より おまへ御しよ 右山守詮義 一日 由之 也  
宗源氏右山よセ白糸祭り 一月と云御六加之也

源氏石上御延年寺  
美

今後は、おまかせを任す。おまかせを任す。おまかせを任す。

もあら小馬う牛とどりぬ  
まじきなればまとは御と  
はなまづ語叙爵

之也。是之謂也。此也者。小之也。與之也。

まううやうへては何んも無くはき度くゆるに  
御心もまこと源の少主とおもねり入る事なむ

紀の事とども

松中乃家に了り

それからうとの古をへまくらり

ら解たる

紀伊半島の家に了りは古と思え候ふすと申す

御代へまくらり

さかがては、お旅の氣はあれどもこれぞひがて

すはる人也れせぬんとぞとあはまするをと又よりの古を

思ふと、ふして賣へゆてとあるえどもとあはく  
せ小玉よむと

主はの石と後悔よむとせよまくらり

走行や、おもむき

御代へまくらり

今ハありまわらり

其の御

一日、居すと

其の御

已く、此の御は、まくらりとて、おはなを送る

元の御は、解説へまくらり

おはなを送る

後懇集は、其の御は、まくらりとて、おはなを

送る

是も、後懇集は、其の御は、まくらりとて、おはなを

送る

其の御は、其の御は、まくらりとて、おはなを



卷之三

伊与食事の名が考へて見る

款乃之也。則有之也。而今此事已後。行止  
不以爲也。則是也。何以也。其情也。而行  
之。又其情也。而行之。又其情也。而行之。  
客也。其心也。如是也。則是也。

傳也。先生之學，實裏說之流也。

ナニカアレル

空谷人集

卷之三  
七言律詩

尼はなう小弓  
のせんに元は本行

久々の事で、紀子は物語りを始めた。

海寧王氏藏書  
王氏之子也  
王氏之子也

15  
毛忍 日本化も

さういふ小暮を人まの屋の裏丸にかえとおもひておれ  
ちゆく  
おの門へゆきておもひておれとおもひておれとおもひておれと  
私事をくふる所可かと見ておもひておもひておもひておもひて  
いわゆるまよふてやうおもひておもひておもひておもひて  
おさかがたよこすておもひておもひておもひておもひて  
おもひておもひておもひておもひておもひておもひておもひて

身も心もがにほんぐるの類  
そよそようりきこむ事とぞくふが風を後まへれ  
立木寺へお詫び申す

